

(曾於郡大崎町大字岡別府字福岡)

### 位置と環境

下堀遺跡は大崎町仮宿台地の中腹部に位置し、持留川を臨む台地の縁辺部に所在する。



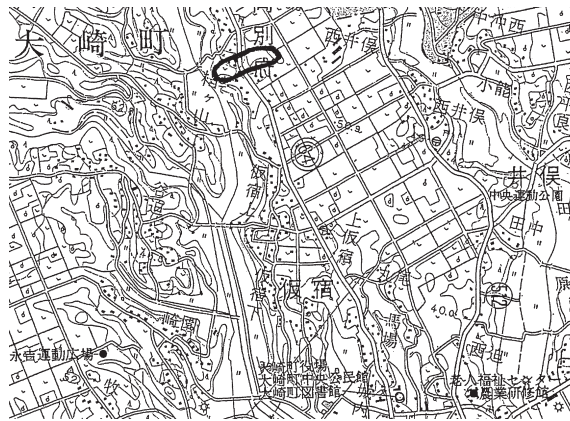
写真1 遺跡の環境

### 調査の経緯

本遺跡の調査は、公団営農用地総合整備事業大隅中央道路の建設に伴い、大崎町教育委員会が緑資源公団九州支社から委託を受け、県教育委員会の協力を得て、平成13年度(2001年)から平成15年度(2003年)にかけて行われた。

### 遺構と遺物

縄文時代早期の遺構は、集石遺構13基(1～13号)を検出した。いずれも5～10cm程度の砂岩や花



第1図 下堀遺跡の位置

崗岩などの石で構成されており、掘り込みは径約80～150cm、深さは12号を除く12基は15cm程度であった。

集石遺構12号は、掘り込みの径が約100cmで、深さが約60cmに及ぶ。集石の底は15～20cm程度の一回り大きな石が2つ敷いてあった。

この時代の遺物には、押型文土器、撚糸文土器、前平式土器、塞ノ神式土器、手向山式土器、石鏃、磨石などが出土したが、集石遺構内から出土した土器片もある。

弥生時代中期の遺構には、約4×4mの方形状の竪穴住居跡が5軒(3号、8～12号)と、円形状の大型竪穴住居跡が2軒(1～2号)発見されている。

この大型住居跡についてであるが、実際は調査区際に2軒とも検出され、いずれも竪穴住居跡の半分のみの調査となった。

竪穴住居跡1号は径約9mを測り、検出面から張床のある床面まで約80cm、掘り込み面まで約90cmま



写真2 集石遺構12号



写真3 大型竪穴住居跡1号

でに及ぶ。1箇所は張り出しが施されている。

竪穴住居跡2号は径約7mを測り、検出面から床面まで約70cm、掘り込み面まで約80cmである。2号は1号と比べて張り出しが2か所あるほか、一部の壁際には床面より約5cm高く段を設けたベッド状遺構も考えられる。

このベッド状遺構は、居住スペースの拡張に伴って設けられた可能性も考えられる。

これら大型竪穴住居跡は、鹿屋市王子遺跡や同市中原山野遺跡などで発見された竪穴住居跡に比較的酷似している。

弥生時代の遺構内からは主に山ノ口式土器といった中期後半の土器が多く見受けられるが、吉ヶ崎式土器のように中期中葉の土器も出土していることから、本遺跡における弥生時代中期も2時期に細分される。

また、大型竪穴住居跡1号と住居跡10号からは丁



写真4 土製勾玉

字頭のある土製勾玉が出土している。

古墳時代の遺構は、溝状遺構や土坑のほか竪穴住居跡(1～2号, 4～7号)、地下式横穴墓5基(1～5号)が発見された。

竪穴住居跡4号と5号の埋土中からは須恵器が出土している。

地下式横穴墓とは、宮崎平野部中心の日向灘沿岸周辺、霧島山麓周辺、大隅半島の肝属平野周辺にのみ分布する独自の墓制を持つ墓である。本町では神領地下式横穴墓群、飯隈地下式横穴墓群、鷲塚地下式横穴墓群の存在が確認されている。

地下式横穴墓は地上から約1.5mの「竪穴」を掘り、その後横に大きく穴を掘り、遺体を安置する「<sup>げんしつ</sup>玄室」と呼ばれる施設をもつ墓制である。玄室内には遺体を安置する施設が施される場合もあり、これを屍床と言うが、大隅半島では軽石製の石棺を設けるケースの調査例も多く発見している。

ちなみに竪穴部から玄室部へとつながり口部分を「<sup>せんどう</sup>羨道」と呼んでいる。

地下式横穴墓は墓制の形状から、細かく分けられているが、大きくは「妻入り」と「平入り」の形態に分けられ、「妻入り」は玄室が竪穴部に対して縦長に配置されているタイプで、「平入り」は玄室が竪穴部に対して横長に配置されているタイプである。

本遺跡の地下式横穴墓は、いずれも竪穴部に対して平入りタイプのもので、玄室はドーム型であり、屍床は施されていない。

地下式横穴墓1号の竪穴部は、掘り込み検出で約3×3m、床面で約2×2m、深さは約1.5mである。玄室は床の長軸約2m×幅約1m、床から天井の高さ約50cmであり、形状は楕円形で、竪穴の断面の状態から追葬が行われたものと考えられる。玄室の床上15cm程度は竪穴側より流れ込んだと思われる土が堆積し、副葬品は発見されなかった。

地下式横穴墓2号の竪穴部は、掘り込み検出面で1.9×1.9m、床面で0.8×1.1m、深さは1.4mである。玄室は床の長軸1.8m×幅1.3mであり、玄室の形状は卵形である。玄室内は天井の落盤により、完全に埋もれていたが、天井の高さは推定約60～70cmが考えられる。

竪穴の断面の状態から追葬が行われたものと考え



写真5 地下式横穴墓2号(手前側玄室)





写真6 地下式横穴墓2号 鉄製品出土状況

られ、副葬品として圭頭斧箭式鉄鏃<sup>けいとう ふせんしきてつぞく</sup>（長さ18cm）、鉄剣<sup>いぎょうてつ き</sup>（長さ53cm）、異形鉄器（長さ18cm）が出土し、鉄剣の下部に人骨片が発見された。

地下式横穴墓3号の竪穴部は、掘り込み検出面で1.8×1.4m、床面で約1.2×1.2m、深さは約0.9mである。玄室は床の長軸1.7m×幅0.8mで、玄室内は天井の落盤により土に埋もれていた。推定で床から天井までの高さ約40cmであり、玄室の形状は楕円形である。

この閉塞状況と竪穴部の土層断面から追葬は行われていなかったと考えられる。

3号墓の羨道は、小さいものは約5cm～約30cm程度のアカホヤ火山灰の土塊を用いて整然と閉塞されていた。

地下式横穴墓4号の竪穴部分の掘り込み検出面は、1.6×1.4m、床面で1×1m、深さは1.2mである。

玄室は床の長軸1.6m×幅0.6mで、床から天井までの高さ約30～40cmを測り、玄室の形状は楕円形である。

羨道はわずかに施されているが、明瞭ではない。

4号の羨道入口は、アカホヤ火山灰の土塊を用いて閉塞されたと思われるが、調査の結果、竪穴部の土層断面やブロックの堆積状況から、追葬時にはブロックで再度閉塞しなかったことが判別され、玄室内は竪穴側からの土の流れ込みによって埋まっていた。4号の竪穴部は整然とした方形であった。また、竪穴部は昇降用かと思われるステップ状の施設が設けてあった。

竪穴部の一辺に接するように土坑が検出されたが、この土坑の床面が羨道入口に向けて傾斜していることから、追葬時に掘り込んだものと考えられる。

地下式横穴墓5号の竪穴部分の掘り込み検出面は、1.6×1.7m、床面で0.9×0.9m、深さは1mで、玄室は床の長軸1.7m×幅0.7mである。床から天井までの高さ約30～40cmで、玄室の形状は長方形である。玄室内は天井の落盤により土に埋もれ羨道はわずかに施されているが、明瞭ではない。

竪穴部の検出状況は、土層断面より追葬が行われた形跡があった。

地下式横穴墓2号、3号、4号に囲まれる箇所には、高坏や埴が意図的に置かれたような状態で遺物が発見され、祭祀用のものと考えられるが、これが地下式横穴墓に関するものかは不明である。

中世から近世には、土壇墓、畝跡、溝状遺構などを検出した。このほか、調査区における台地の縁辺部では、おびただしいほどの柱穴・土坑が発見された。

また、近世のものと思われる炉が数基を検出したが、そのうちの1基は炉部分が径約1.5m、深さ約1mを測り、焚き口のある側も長さ約3.5m、幅約



写真7 地下式横穴墓3号竪穴部及び羨道部閉塞状況



写真8 祭祀遺構

1 m、深さ約1mの大きさの掘り込みが施され、炉の規模は大型のもので、連結部分は落盤していた。

炉内の埋土は約5～10cm程度の焼石が多く含まれているが、炉の床面には多く敷かれた状態で、焼石の間に孟宗竹かと思われる竹の炭化物が出土している。

#### 特徴

本遺跡では、まず古墳時代における地下式横穴墓の時期と性格を知るうえで重要な資料が得られた。これまで発見された大隅地域における地下式横穴墓は、平入りタイプが5世紀代の妻入りタイプに続くもので、6世紀代に出現するとされていたが、地下



写真9 大型炉

式横穴墓2号から出土した鉄製品の時期が5世紀後半のものと考えられることから、平入りタイプが妻入りと同時期に存在していた可能性も想定できる。

副葬品の異形鉄器は、鹿児島県内で山川町の成川遺跡の土壌墓から発見されているが、大隅半島ではこれが初見であり、このことが異なる墓制を持つ2

つの文化圏を結びつける貴重な資料と考えられる。

さらに、地下式横穴墓が大規模道路の建設に伴う調査で複数発見されるケースは、これまで少なく、地下式横穴墓及びそれを取り巻く遺構の位置関係を探ることもできる。

弥生時代では、大型竪穴住居跡が発見されたことである。この大型竪穴住居跡は、これまで、鹿屋市の王子遺跡・前畑遺跡・中ノ原遺跡・中ノ丸遺跡、大崎町の沢目遺跡、有明町の長田遺跡などで発見されている。このような資料の増加により弥生時代の大規模遺跡は、県内の大隅半島中心に広域的な広がりの可能性を残している。

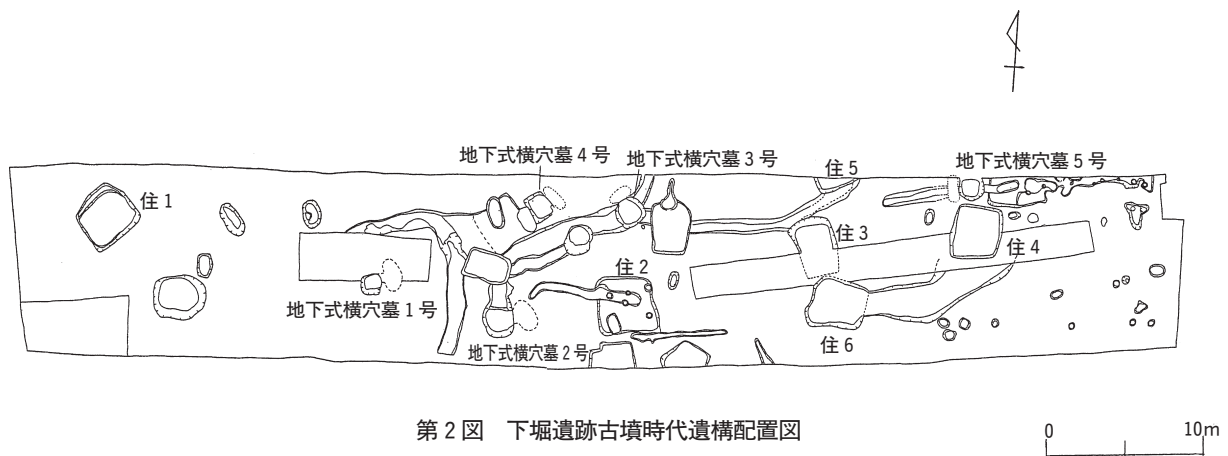
#### 資料の所在

出土遺物は、大崎町中央公民館郷土資料展示室内収蔵庫に保管され、一部は展示されている。

#### 参考文献

大崎町教育委員会2005「下掘遺跡・大崎細山田段遺跡」『大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書』（5）

（内村憲和）



第2図 下掘遺跡古墳時代遺構配置図